パラレル・マイ・ライフ

架引

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パラレル・マイ・ライフ

【Nコード】

N9359W

【作者名】

架引

【あらすじ】

警告：これはSFですか？ いいえ。これは、ファンタジーです。

技術が進歩し、ゲーム業界でついにバーチャルリアリティではなく、シュミレータード・リアリティが搭載された新型SRMMORPGが誕生した未来。

そのゲームの記念すべきファースト・タイトルは、『並行するもう一人の自分』^{パラレル・マイ・ライフ}。その名の通り、架空異次元世界において、もう一人の自分となるアバターを作成し、剣と魔法の世界における架空の

人生を楽しむことが出来るゲームである。

主人公・アキヤはこのゲームをやっている最中に突如謎の光に包まれ、気を失った。

そして、目が覚めるとそこはまったく見知らぬ風景だった。

ログアウトしようにも出来ない。そして、ゲーム中には出て来ることのなかった、未知の魔法。その事態に、最初はと言うことなのかと訝しんだが、最初に出会った少女、セフィアナとの会話中に出てきた聞きなれない単語の羅列に、やがて自身は、ゲームのシステムやデータを自身の能力として引き継いで、別の世界へと転移してしまったと悟り始める。

そこは、絶対王政や封建制度が強く根付き、人里の外では猛獣や魔獣が蔓延り、それらへの対応が一般兵や騎士、そして冒険者などによってなされる、ファンタジーそのものの世界。

アキヤはその異世界で第二の人生を生き残ると言う建前で異世界ライフを満喫するべく、冒険者となって旅に出るのであった。

第零章 進歩する仮想現実

科学技術は常に進歩する。

あらゆる科学技術は、日々、研究を重ね、失敗を元に、新たな仮説を立て、そしてそれらの結果から生まれた結論が、進化という結果となる。

バーチャル・リアリティ、と言うものがある。

これは、『五感を刺激し、あたかも本当にその物事を体験しているかのような環境を擬似的に生み出す技術』、である。

体をパラシユートに模したもので吊るし上げた上で特殊ゴーグルによって上空数百メートルの視界を再現、さらに下方から送風すれば、それはパラシユートによる降下最中の環境を作り出せることだろう。

だが。

それらは、最早過去の産物といえる時代になってしまった。

SR……シミュレーテッド・リアリティ。

脳波などを使って、シミュレーション参加者を現実と区別がつかないほどの仮想世界へ誘う、新たな技術の登場である。

当初は安全性について議論されたが、研究が進むにつれ、その安全面についてもほぼ問題なし、と言うレベルになれば、各国がこぞってこの技術を軍事採用。

そして、SRが一般企業にも流入してくるようになると、爆発的に一般民衆にも、その技術が広まり始めた。

その普及速度は目を見張るものがあり、瞬く間に世界中の民衆に浸透した。

ネットワークによるコミュニティからウェブカレッジ。中には、独自の空間が欲しい、と言う人のためにと、架空マイホーム体験SRなんてものも登場する始末だ。

そうして、時は流れた。

今や、S R 技術が使われた架空現実体験機は一般家庭でも簡単に買えるくらいの値段となった。

そして。それらの中でも。

特に大人の、それもゲーマーに変革を与えたものがあつた。

それは。

多人数同時参加型 S R R P G …… その名も、『^{シミュレーター}並行するもつ一人^{マイ}の自分^{ライブ}』である。

プロローグ

「そして、ここがこうなるから……こうであり、故に、ここがこうなる、ということである。では、今日はここまで」

キーンコーンカーンコーン……。

区切りのついたところで、講義の終了宣言。それを裏付けるかのように鳴り響く、古めかしいチャイム音。

そして、待ち望んでいたかのように、一気に講義室の空気が緩んで言った。今行われていた講義は、時間的にも今日最後の講義である。つまりは、殆どの生徒は、もうこれで放課、と言うことである。「ふわぁー。今日も終わったなー。……さて、と。もう今日は受ける講義も無いし、家に帰って、」バラレル・マイ・ライフ 並行するもう一人の自分』に口グインするか」

と、アキヤもまた、その例にこぼれない。

そして、彼はゲーマーである。ハマっているゲームは全力でプレイするゲーマーである。故に彼のプライベートは、毎日殆ど決まっていた。すなわちコンピュータゲームである。

講義で使った教材とノート、筆記用具をしまい、忘れ物がないかのチェックを追えると彼は足早にキャンバスを去った。

大学から自宅まで、電車に乗ること三十分。さらに、駅から十分ほど歩くと、隣街にある一戸建ての自宅に着く。

彼は玄関から家の中に入ると、

「ただいま」

と、居間にいる母親に帰宅した旨を告げた。

「あ、お帰りなさい、アキヤ」

返事を横耳に聞きながら、彼は二階の自分の部屋へと籠った。

そして、部屋に入ると鞆をいつも置いている場所におくと、今流バラレル・マイ・ライフ行の世間ではやりのMMORPGである『バラレル・マイ・ライフ』並行するもう一人の自分』をすべく、ヘッドギアのような装置を頭に被るとベッドに横た

わった。そして、ヘッドギアから延びるコードのボタンを、押した。その瞬間に、アキヤの意識は、現実世界から離れた。

SRMMORPG、『一並行するもう一人の自分』パラレル・マイ・ライフ。これは、バーチャルリアリティ（VR）を上回る仮想現実技術『シミュレータード・リアリティ』を採用したゲームである。VRでは不可能なほどの現実再現力を誇り、その情操への危険性にも考慮されているという大人気ゲームだ。

SR体験機と言う装置に、専用ソフトウェアでインストールすれば誰でも遊ぶことが出来る。

因みにSRとは言うが真の意味でのSRは危険、と言うことで開発されていない。今あるのはVR時代の発展型、と言った感じである。現実と混同しかねない再現度でこそあるが、一応区別がつくような工夫はされている（真の意味のSRは、現実と仮想現実との区別がつかないとされている）。接続時間の限定や再現度の限定の可能性などがそれである。

もう一つ。仮想現実体験中は、現実では意識を失った状態にあるので、外部刺激では一切現実に戻ることが出来ない。が、地震や火事のアラームなど、何らかの原因でコンピュータが危険を察知すれば、即座に現実へと引き戻される安全設計だ。さらに、メッセージ機能がついているので仮想現実をお楽しみ中でも現実世界の人のやりとりも一応は可能である。

アキヤは今、現実と仮想世界の狭間とも呼べるところに意識を漂わせていた。といっても、これはどのソフトウェアを起動するか、それを決めるための仮想空間である。

何処までも暗く、そして何も無い。だが、アキヤの瞳には、虚空に映し出されたメッセージとリストが映し出されていた。

『起動する仮想現実を選んでください』アプリケーション

アキヤはタッチパネルの要領で、そのリストの『ゲーム』パラレル・マイ・ライフから、今自らがやるうとしていたゲーム『一並行するもう一人の自分』を

選択した。

リストが消え、読み込み中のメッセージが現れる。

そして数秒後、『一並行するもう一人の自分』パラレル・マイ・ライフのタイトルロゴが現れたと思ったら、白いフラッシュ、直後に積み上げたレンガの壁が崩れるかのように、周囲の風景が変わった。ゲームの読み込みが終わり、ゲームが起動した証拠である。

アバターに不具合が生じていないか、体を動かして確認して、問題ないことを確信すると、彼は、

「よし……ゲーム開始だ……」

と呟きながら、スタート地点である、辺境の村落から草原に踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9359w/>

パラレル・マイ・ライフ

2011年10月30日03時12分発行